Japanese Association for Religious Studies

けに限られないレーウの宗教論全体の特徴である。「かたどることと経験することは分離されることがない。かたどることは経験の封を開き、それを可能にし、それを伝え、それを高揚させるのである。かたちと経験を分離することは双方を破壊することである」とレーウは述べている。

これらをふまえた上で「聖なる言葉」論へ視線をもどすと、「ちから」を呼び覚ます「聖なる言葉」は自由な散文的形式というよりむしろ「決まり文句」であるという。字句や響き、リズムにおいて規定されたフレーズに組み合わされるとき、言葉はその力をもっとも発揮する。現代人が古い「決まり文句」を軽蔑するのは、逆にその力を恐れているからだ、とレーウは論じる。なかでも、レーウが重視するのはその「リズム」である。リズムを秩序だて整えることを通して「ちから」は集中され、制限され、固定化され、高められる。また逆にリズムを弛緩させることによって「ちから」は切り捨てられる。このようにレーウにあっては「かたどり」はリズムを介して「ちから」を統御する技術であるともいえ、言葉を用いてなされる「かたどり」としての祈りにあっても同様のことがいえるのである。

本発表ではレーウの祈り論を、彼の祭儀論にかなり引き寄せて論じてきたため、祈りという実践の独自性に関するレーウの議論をかなり捨象してしまったきらいがある。しかし、ここで論じたような視点は、どうしても言葉の意味やそこに表明された思想の研究に偏りがちな祈り研究に新たな示唆を与えてくれるものであると考える。

G・サンタヤーナにおける自然主義と宗教

庄司一平

ジョージ・サンタヤーナの「自然主義」の立場は、少なくともその宗教論においては、あらゆる現象を「自然」と「超自然」に二分する還元主義ではなく、自然的物理的な説明も精神的道徳的な説明もあり得るとする非還元的な両立論をとっているように思われる。たしかに、人間は、その「動物的」（自然的）な生活において、外界の事物の存在や事物との行為的かかわりなどを素朴に信じており（「動物的信」に基づく実在論）、このプラグマティックな態度こそが自然主義の基礎である。しかし、サンタヤーナによれば、芸術や宗教の空想的世界と日常の自然的世界とは別のものだという。

サンタヤーナにおける宗教の本質論によれば、神話や宗教的な表象・象徴は、詩的な想像力が人間の熱望や欲求を反映させて「自然に」創り上げられた、いわば象徴体系として機能する。それら象徴化された人物や神々はリアリティをもって人々の前に現われる。さらに、宗教と詩はともに人間の理想や期待の表現形式である点で、本質的に同一である。宗教と詩は、ただ生の実践に対する関与の有無によって区別される。すなわち、それが生の只中に深く関わってくる場合には「宗教」と呼ばれ、生に対して何の実践的影響ももたらさない場合には「詩」と呼ばれる。すべての宗教において、生の条件や目的は

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

詩的に表象される、これが、宗教の唯一の真理である。ところが、宗教はしばしば象徴であることを忘れ、文字通りの真理や情報、道徳的権威などをほしいままにしようとする。これに対して詩的な表現は、ただ存在と想像力の自由な領域に身を委ねる。つまり、宗教は生に対して、究極的には詩と同じ価値を有するにもかかわらず、知識や経験にとらわれやすいものであるために詩よりも劣るのだ。宗教のこのような両義性に対する価値判断には、暗にカトリックを美的感覚に正直な庶民の宗教として肯定的に描き、反対にプロテスタントを美的要素が削ぎ落とされた知的な宗教として多分に否定的に述べるという彼自身の美的嗜好が、顔を覗かせている。

一九二五年出版のジョン・デューイの著作『経験と自然』に対する書評において、サンタヤーナは、デューイの言う自然主義が不徹底であることを自然における「前景の支配」という語で解き明かす。デューイの自然主義は人間の「経験」という「前景」すなわち特定のパースペクティヴに立つというドグマティズムを内包しており、これは自然主義ではなくヒューマニズムでしかない。しかし、サンタヤーナは、デューイの自然主義を偶像崇拝（人間崇拝）といって破壊するのではなく、むしろそれに象徴的な意味を読み込んでしまおうとする。例えば、デューイの自然主義はアメリカの生活文化が要求し生み出した象徴だというように。サンタヤーナの書評に対するデューイの応答は、サンタヤーナの自然主義の方こそ中心となる支柱がないということに尽きる。デューイは、自分が人間的生の自然的基礎をないがしろにするようなヒューマニズム（人間中心主義）には与しない自然主義者であることを繰り返し表明する。しかし、自らドグマティックな自然主義者を名乗りながら、空想の世界に対する憧憬を隠しきれなかったサンタヤーナは、デューイと同じく「ドグマティズム」に陥ることを如何にして回避しようとしたのか。

結局、宗教は詩の自由さに及ばない。宗教は詩になることはできない。それでもなお、サンタヤーナは、宗教と詩が一致するような空想的世界を好んだ。詩的空想の世界への憧れが叫ばれるその反面、自然に囚われた宗教や動物的人間に対する愛着や愛おしさも捨てきれない、このような二元論的一元論が彼の自然主義的宗教論の底に響きわたっている。

《概念枠》としての宗教理解を巡って

飯田　篤司

現代哲学における「言語」の前景化に伴い、「概念枠」として特徴づけられよう一群の宗教観が語られてきた。世界経験を必然的に媒介する言語が形成する排他的な概念枠と、それに相対的な真理というモチーフは、諸文化伝統の自律的な価値を語ることを可能としてきた。さらに日常言語使用や科学には回収されない独自の宗教的真理や意味を語る「宗教言語」という理念も語られてきた。しかし、この言語的境界はまた、根本的な概念的相違によって他者との対話さえも困難となる概念相対主

NII-Electronic Library Service